

## 特集「IHI 力」号の発刊にあたって

代表取締役副社長 大谷 宏之

当社の創業は、アメリカの「黒船来航」への対応策で嘉永6年（1853年）、水戸藩徳川斉昭公が幕命により江戸・石川島の地に造船所を創設した日だとされています。「黒船来航」当時のアメリカは、1848年までにオレゴンやカリフォルニアを獲得して太平洋国家となり、清との交易が国家目標になっていました。一方、欧米では鯨油がランプの燃料に使われ、乱獲によって捕りつくされた大西洋に代わって捕鯨ポイントは太平洋に移り、捕鯨の主力補給基地となっていたハワイの次の拠点候補が日本だったようです。ジョン万次郎が捕鯨船に助けられてハワイ経由でアメリカ本土に護送されたのもうなずけるところですが、1859年になると石油の機械掘りが始まり、捕鯨も下火になっていきます。ランプの燃料も、植物油、魚油、鯨油から灯油へと移り、その後は、ガス灯、白熱電球、蛍光灯、LEDと時代と共に進化していくなかで、多くのドラマが生まれてきました。



イギリスで蒸気機関が発明されて第一次産業革命が起き、その後電気の時代（第二次産業革命）、コンピュータの時代（第三次産業革命）から今やICT／IoT／AI／Roboticsの第四次産業革命時代だといわれています。人類の歴史は、常に新しい技術が発明され、マーケットが変わり、経済も変革を遂げながら豊かな生活を実現してきました。今、我々は第四次産業革命の真ただ中にいます。最近の技術の動きは、とにかくスピードが半端でないこと、グローバルのマーケットであらゆる製品やサービスが一気に影響を受けること、単独の技術の発明よりは、複数の技術を組み合わせ、大学、官庁をはじめ、お客さま、競合先、業界の枠を越えた連携のなかで生まれていることが特徴です。いわゆる「つなぐ技術」こそが技術力の中核といえますし、ビジネスモデルや必要な人材、組織体制も柔軟に変えていかななくてはなりません。蒸気船によって「太平の眠り」から目覚め、電気を使い、コンピュータを駆使して今日の発展を築き上げてきた日本の国は、「ものづくり力」に裏打ちされた知見や技術を基に製品・サービスを世の中に送り出して世界中から信頼を勝ち得ています。これらにICT／IoT／AI／ロボットなどを組み込み、ハードからソフト、システム、情報やデータ、ネットワーク社会へと全く新しい概念のサービスを提供していくことが今後の成長・発展には不可欠です。

常に未来に視点を置くことで生まれてきた技術は、新たな時代の新たな価値の提供に必ずや活用されるものと確信しています。白熱電球を実用化した発明王エジソンは、未来の技術として、セルロース、電気自動車、太陽光発電、プレハブ住宅、胃カメラ、巨大電子顕微鏡などを予言していたそうです。石油の採掘があと10年早く始まり、捕鯨が10年早く下火になっていたら日本の開国はどうなっていたか、20年後の世の中はどうなっているのか、考えるとワクワクしますね。